

山と博物館

第16巻 第2号

1971年2月25日

大町山岳博物館



給餌台のえさ(パン)にむらがった冬季のオナガ

撮影 細野哲夫

オナガとツバメ

今までの数多くの野生の動植物が急速に姿を消し、逆に今までのいなかった新顔がはびこって来たという話は、いろいろな生物についてしばしば聞かされる。北ア山麓の大町地方に見られるオナガも、近年になってはびこって来たものの一例であろう。

大町地方にオナガが姿を見せ始めたのは二十年前ほど前からである。今では市街地周辺のいたる所で群をつくって騒々しく鳴きながら飛び回り、その姿は山麓の冬の風物誌として違和感を持たないほど普通のことになってしまった。彼らの生活は市街地周辺に広がる耕作地や果樹園、そのあたりにある山林など、人間くさい環境と密接な関連があり、それらの環境が拡大されるに伴って分布域を広げているのではないかとわれている。

ところで、人間と深いかわり合いを持ちながら、その種族を維持してきたと言われるツバメについて、長野市柳町中学校動物クラブの生徒たちは注目すべき調査を行った。

それによると長野市のツバメは、急激な都市化と並行して十数年間には市街地や水田地帯でその数が減少し、昭和四十年以後は減少分だけ善光寺盆地の東と西の農山村で増加していた。ところが、我が国の高度経済成長が何かと議論を呼ぶようになったここ二・三年の間に、増えていたはずの山間地のツバメまで一斉に激減し始めたと言う。

オナガやツバメは人間の生活域で人と共に繁栄できるきわめて人間くさい鳥である。彼らが人為環境の局地的な変化に影響されながら生活の場所を移動し、時には分布域を拡大したりして、人のまわりで生活している間はまだまだ問題が少ないだろう。しかし、これが全面的に消滅するような状況になった時はどうなるのだろうか。人間も含めたすべての生物が共倒れの終末的運命をたどった時でないことを祈る。

(山 猿)

たくましく生きる鳥 『オナガ』

— 人間生活とのかかわり — 細野 哲夫

オナガは、その尾羽が長いことからオナガドリともいわれ、また、鳴き声から地方によっては、ギヤギヤドリとも呼ばれるカラスクの鳥である。日頃耳にする声の騒々しさにひきかえ、その姿は黒いベレー帽をかぶったような頭部、淡青色の翼と上背、純白な腹部といった単純な色彩のとり合わせではあるが、清楚な美しさをもっている。

最近この鳥は、日本のある地方では姿を消し、ある地方では逆に分布を広げている。これは、極めて興味ある現象であり、また、重大なことでもある。ここでは、それらの現象や、オナガの生活の一端を述べてオナガ理解への手がかりを供したい。

1、営巣樹と巢材

善光寺平では、平地の部落周辺や山麓と人家との境界附近を生息場所としており、各地

第1図 長野県内におけるオナガの分布



にみられる一般的な鳥である。彼等は、繁殖期には、その地域の樹木に営巣するが、川中島町北戸部の例では次のようである。調査件数七十例の営巣樹種と利用件数をみると下記のようになる。カキ(19)、スキ(8)、アカマツ(7)、イチイ(6)、リンゴ(6)、カエデ(4)、ウメ(3)、サクラ(3)、クルミ(3)、カシワ、ケヤキ、カシ(各2)、アンズ、モモ、キリ、ヒノキ、クスギ、マサキ、ナシ、スモモ、タケ、サクラ、ハルコガネバナ(各1)。以上二十三種は、当地方の人家周辺に植えられてある殆どの高木が対象になっている。このことから、オナガが営巣樹の選択に中広い適応性をもっていることが推察される。これは、この地方の人家周辺での繁殖を可能にしている一因と考えられる。オナガが営巣樹を選択するに当たっての巾広さをもつものとして、ポルトガルでの一例を付記しよう。オリブ、オレンジクワ、ドリネコ、ユーカリ、ウバメガシなどである。

ところで、営巣に当ってこのように多くの樹種を利用するが、必ずしもその植えられていた本数には比例しない。例えば、川中島町附近ではリンゴやモモの果樹が沢山植えられ

ているが、すでに示したように利用件数極めてすくない。そのみか、利用度の多い樹種でも利用回数は異なっている。大方の木は一回だけであるが、なかには二、四回も利用されている。四回も利用されたイチイの木は写真①に示したように人家の庭先にあり人目にふれやすい場所である。しかし、どの果も木の頂上近くの横枝の上にあり、外からは見にくかった。ともかくこのように人家庭の樹木を活用する習性はオナガの人家附近への住み込みを促進しているものといえよう。

次に、巣造りに当っての材料であるが、これも人家周辺の材料を巧みに利用している。オナガの巣は普通細枝で椀形に基部が構成され、内部は土でかためられ、内壁は樹皮や苔類で張られる。この巢材の細枝はある巢の一例では、三十七センチメートル前後であった。このうち最も長いものは四十八センチメートル(カキ)であった。この巢で用いられたおもな枝は、リンゴ、モモ、カキなどでいざれもこの巢の近くの家の軒下に積んであったものである。また、別の巢のことであるが、ビニールのひもを用いて、巢の下へ垂れさげてしまい、巣が発見される糸口をつくってしまった例もある。なお、巢の中央底に敷きつめられる土は、最も厚いところでは二センチメートル程であった。おもしろいことにこの習性は、ホシガラスやカケス、カササギにもみられるものである。また、内壁の内張りの材料も地域で異なっている。例えば川中島町の一例では、総てシユロの木皮でできていたが、飯綱一の鳥居のものでは藓苔類でできていた。一方ポルトガルのは、ヒツジやヤギの毛で裏うちされるという。

2、激しい攻撃

オナガの研究では、どうしてもその巢へ上らなくてはならない。上ると雌雄でギヤギヤと激しく鳴きたてる。これは、ローレンツがいつているように確に、捕食者(観察者



写真① 4回巣営されたイチイの不同環境 (細野)

一)の意図達成を困難にし、今後の行為を思いとどまらせる効果がある。(ソロモンの指環七十二頁参照 日高訳)そして、これでも去らないときは、遂には襲いかかり、頭上をかすめとぶ。そして、しまいは頭や肩を蹴飛ばすのである。この時以後、オナガとの関係は、ネコや捕食者である猛キン類並になるのである。観察しようと巣の下へいくと梢や近くの物かげから現われてギークイキイと鳴きたて、頭上へ迫ってくる。このつきまとい行動は極めて執拗であり、その個体の行動圏内にいる間はついてあるかれ観察はできなくなる。しかも明らかに対象を区別しており一般の人々には何等の反応を示さないのであり、識別のポイントをどこにもついているか、なかなかの知恵者である。この識別力は、七十メートルにも及んだ例があった。この習性は、幼鳥を連れてくる家族群が木立内やリンゴ園にいるときは向うから居場所を覚えてくれることになり勞せずして群を発見することができた。



写真② 激しく攻撃するオナガ(細野)

ところで、十七ヶ所のネグラのうち大半は人家の庭木や、人家に接した上述のような樹種の林である。人通りという点からみ

ると農道に接したものが半数以上になっている。これらのことから、オナガは、人間生活に接近したところにネグラをとり、人間の存在によって天敵から防衛されると考えられる。また、ネグラ利用樹に好まれる当地方のリングゴは約三十年來のもので、それ以前は水田またはクワ畑であった。けれどもオナガはそれ以前も当地地方に見られているので人家周辺の山裾の落葉樹林、松林や人家の庭木のネグラが本来のもと考えられ、リングゴ園を利用する習性は新しく獲得されたものと考えられる。

4、ネグラ

ネグラは、鳥類の夜の休眠場所であり、安全性を確保する上からも大切なものである。川中島町の常行寺附近に生息する群についてみると次のようである。

ネグラの使用樹種は、日中行動圏内にネグラがもたれたときはリングゴの果樹のみでモモやナシの果樹は使用されなかった。日中行動圏外にネグラをもったときは、タケヒノキ、スギ、イチイなどでタケが最も多く使用された。なお、春先から初夏にかけては非繁殖期のネグラとして使用されていた常緑樹のタケ、スギ、イチイ等は他の鳥類が使用もしないのにリングゴの木に変更されたのである。このことから、葉の茂る時期のリングゴの木を最も好み、リングゴの木が落葉するとやむなく他へ移るものと考えられる。

5、分布の拡大

地域開発という名のもとに次々と自然が破壊され、そこに生息する鳥類、例えばタンチヨウ、トキなどが絶滅の一途をたどっていることは周知のとおりである。

このような折りにオナガの分布についてみると、そこに全く相反した現象が生じていることに気づくのである。すなわち、西日本の佐賀地方では昭和三十三年を境として、その姿を全く消してしまっている。それに対して関東地方を中心に静岡県、東北、北陸地方には広がっているのである。従来オナガの生息が見られなかった秋田県にも四十五年十一月二十三日北秋田郡田代町長坂と同大巻の中間の米代川沿に七羽の群を自撃と報告が筆者あてにであった(小笠原篤氏)。オナガの分布が広がっていることは、長野県内でも同様で、今迄分布繁殖のみならなかった伊那地方において、四十五年夏伊那市信大構内で一巢七卵の孵化を七月六日に確認(宮沢和人氏)された。また、その南の大田切川沿で、母袋卓也氏によって三、四十羽の群が確認された(四十五年十一月二十二日)。諏訪湖北部へ現れ



写真③ オナガのネグラ、用水にそったタケ藪(細野)

たのも近年のことである。その生息地を植生別に分類してみると、生息場所は住宅地、果樹園、畑、針葉樹林、ヨシ原など多岐にわたっている。それぞれの植生にしめる割合をみると、住宅地三十一%、果樹園二十五%、広葉樹林十六%、針葉樹林十一%、針広混交林九%の順である。このことから住宅地や果樹園との結びつきの大きいことが考えられる。また、果樹園をはじめ他の樹林は、多くは部落から三百メートル以内のところであり、人手の加わった人為的要素の強い樹林であることが推察される。以上のような環境は、非分布地の飯田、木曾地方にもみられるもので、この点から今後さらにオナガの分布の広がりが予想されるのである。

以上オナガの生活を人間とのかかわりを中心に触れてみた。営業樹、ネグラ、生息場所と人間の生活域にうまく入り込んで生きているオナガは、自然破壊が繰り返される現代のなかで、たくましく生き残る種の一つとみられる。最後に、この鳥がいつまでも私達の周辺にあってくれることを願って筆をおく。

(長野市朝陽小 日本鳥学会会員)

3、一日の行動圏

オナガは非繁殖期には、群単位で移動していく。この群の一日について幾度か追ってみることがある。群を追うには、前日の夕方ネグラに入ったのを見とどけて、次の朝早くネグラから出る前にネグラについて行動開始をまつのである。一度ネグラからでると群は、一定地域内を終日移動し、夕刻再びネグラへもどるのである。この移動の経路は、菓立つたばかりの家族群では直線的である。一ヶ月程たつた家族群では、単純な周回路をかたちづくる。それに比べて地域群(家族群が集つてきた一地域の群)では、極めて複雑な経路をとるが、その行動圏は一定地域内に限られ、何年か経ても大きな環境変化がないかぎり、その行動圏はかわらない。地域群の一定地域内での移動場所は、川中島町では人家

周辺と果樹園であり、冬季には特に人家周辺の木立との結びつきが大きかった。東京都下久留米町や軽井沢でも特定地域との結びつきが大きかった。ところで、一日(二十四時間)のうちの活動時間は家族群で約六十パーセント、地域群で四十五パーセント前後であった。また、鳥類の飛翔力は、敏速なものであるが、群としてみた場合には、時速は約三百四十メートルから五百二十メートルであった意外に小さいのである。移動の距離は約三・五キロメートルから五キロメートルであった一日の行動圏は東西約〇・六五〇・八五キロメートル、南北約〇・七〇〇・八キロメートルであった。これは、善光寺平では、およそ一部落の広さに当る。この見当で、冬の群を調べてみたところ、ほぼこのようであり善光寺平川中島町附近では、部落の分布と果樹園(リングゴ)の分布にそって群が分布していることがわかった。

解明を要する北安(北アルプス)の蝶

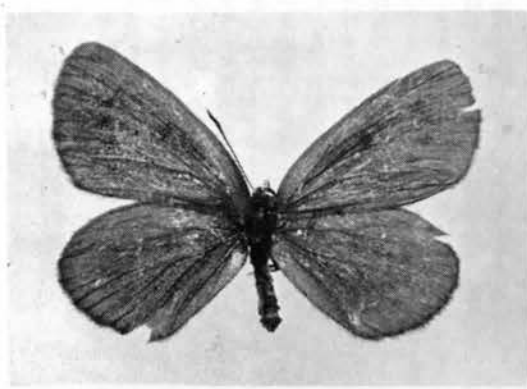
清 沢 晴 親

(1) ヒメギフチョウとギフチョウ

(あげはちよう科)

信州の山里に、サクラヤスミレが咲く頃に
なると、黄と黒の美しいだんだら模様をつけ
たかわいいうがハが吸蜜にやって来る。これ
が「春の女神」とまでに言われている、ヒメ
ギフやギフチョウであろう。これ等の蝶は、
日本を主産地とした東亜の持産種であって、
両者が非常によく似ているので、昔は、これ
が、別種か、別亜種か、又は同一種であるか
の区別に苦しんだが、研究の進むにつれ別種
扱いになった。然し現在もなお幾多の疑問を
残しているのが人々の関心を集めている。

ヒメギフは県下全域にわたって、山地に多
く分布し、北にのび、東北から北海道に及ん
でいるのに反し、ギフチョウは、木曾や下伊



白馬ヤリ温泉道で採集されたゴマシジミ矮小型 (小林探 堀撮影)

那の南部・北安の北部・飯山等に局所的な分
布をしているのみで、主に本州の暖帯地域に
棲息している。共に幼虫は、うまのすずくさ
科であるウスバサイシンをヒメギフ、カンア
オイ類をギフが食べている関係もあり、かな
りはつきりした分布区域を示すのが通例であ
る。

然るに、両者が分布する接点近くには例外
も見られる。中でも「北ア」の姫川溪谷に当
る長野・新潟の県境近くでは、前記の気候帯
や、食草の問題が無視され、両者の混棲や分
布の逆転、食草の転換等、諸種の生態的な異
常のあることが、早くから細野・倉田・福島
氏等により報せられていた。最近是新たに雑
交個体の採集及び飼育例を聞く事が多くなっ
て、著しい関心が寄せられ、益々興味を深く
している。

八方山で、ミヤマアオイを食べているギフ
チョウは標高一七〇〇mに棲み、寒地性のヒ
メギフより高所に生活する珍現象を示したり
小谷村大網のような混棲地がある等は、この
地が日本海に近い深雪地域で、積雪下気温の
激変を外に休眠出来る事が主原因で、食草
の点も、北部にコシノカンアオイがあり、内
部に進んでミヤマアオイの分布が広く、尚全
域にウスバサイシンがある。けれども、白馬
山麓二股(八〇〇m)附近では、ギフ・ヒメ
ギフ共にミヤマアオイを食べ、大網(三〇〇
m)では共に、ウスバサイシンによると細野
・倉田等により報せられている。(後者は再
確認もされ、現在カンアオイの分布は認めら
れていない。)

一方前述の自然雑交の問題に関しては、従
来ヒメギフとギフとは、成虫の発生季節にず

れがあるか、食草の違いから混棲した場合
も自ら区別がある等と考えられていた。然し
北安のような多雪地では、所により積雪量の
差もあり、融雪が遅延が出来るという微気候
的な環境が影響し、発生を重なりあいが大き
かったり、食草が同一であることは、体臭な
どによる忌避的な反応も混乱を生じ、錯覚を
起すような状態から雑交を招くのではないか
とも想像される。元来二種が長い間の生態的
隔離の為に生じた、生態種的なものであり、
混棲という生態的变化が現在の雑交を起した
とも想像出来る。現に実験的には雑交に成功
し、雑種をつくり、F₂にまで及んだ結果も
報告されているので、大網に於いて時々発見
される雑交個体が、どのような経過を経てい
るか、究明を要する課題であると思う。

現在採集されている雑交個体は、交尾によ
ってギフの雌とヒメギフの雄によって生じた
黄褐色の受精卵が附着している場合とか、こ
の反対に黒色の受精卵がヒメギフ雌に着いて
いるという特殊な現象から判断される採品で
あったり。前者から得た幼虫が、全くの熊毛
虫でなく、気門周囲に黄色斑が出ることなど
が確認の対照である。倉田氏からも白馬二股
のギフチョウ卵から黄色紋の出た幼虫が報告
されている(一九六〇)。かかる幼虫が現地に於
いて完全に成育をとげ、子孫を残し得るか否
か、もしこれが前述の実験報告のようであつ
たら、この地のギフ・ヒメギフの間にはかな
りの変異が認められるのではないかと期待さ
れる。

(2) ゴマシジミ(しじみちよう科)

草原性の蝶で国内分布は、北海道・本州・
九州と広いが、その産地は局所的で地方的な
変異の多い事で注目をあびている。幼虫の食
草は3令までが、ばら科のワレモコウ類の花
穂で以後はクシケアリの果中で、この幼虫を
食べて成育し翌年八月蝶になって飛び出すと
いう念のはいった生活史の持主でもある。
信州での分布は、まだ充分な調べがなく産

地は誠に少ない。北アルプスに添った南、北
安嶽もその例にもれず、南安での産否は不詳
で、北安では、白馬山麓と八方山の二箇所に
記録があり、隣接の新潟県側や戸隠附近のも
のと同様に黒化した翅を持つ、カザモト型で
(松本周辺や木曾等に見られる、翅に青色鱗
を多くもった、ダイセン型に近いものとは、
その差も大きい)本州中部で知られる代表的
な型ではあるが、八方山(一九七四m)とい
う、北アルプスの高山帯に産し、且つ形も大
きい点などは、北海道のような寒冷地に産す
るものが小形であるのに比べて興味深い。

一方白馬山麓、猿倉・鍾温泉間の標高(一
七〇〇m)辺の巨大な岩の上で得た(浜栄一
氏一九六五・八・八採)極めて小さい、カザ
モト型の個体二頭が、斯学の注目を引き、「
新亜種の代表ではないか」と、白水先生の発
表されることとなった。

(一九六六 白水隆・黒子浩 標準原色図鑑
全集1 蝶蛾 P.58 大阪)による)
この産地は急斜面で、巨岩上には草木の着
生もあるが、附近に全くワレモコウも同類の
カライトソウ・トウチソウ等の食草も見当ら
ぬ所であり、ゴマシジミの習性から食草の周
辺を余り離れないにもかかわらず、二頭が得
られたのは驚異なことであった。
然るに、翌年同一場所で一頭の類似個体が
得られた。(小林靖彦氏一九六六・八・七採
)これにより益々この神秘性を深めたが、そ
の後は矮小型種の採集を聞かない。
所が、この附近で最近、大型の個体で、八
方山産のものに変わらないものを得たというニ
ユースもあるが、二年間続いた不思議な個体
に関する究明もせまられた一つであろう。

山と博物館第16巻第1号
発行所 長野県大町市TEL②(〇二二)
印刷所 大町市下町山岳博物館
定価 年額三〇〇円(送料共)(切手不可)
郵便振替口座番号(長野)三二一九三